

乳幼児突然死症候群(SIDS)に関する研究

最新(1988-1989年度)の乳幼児突然死 症候群関連文献の検討

仁志田博司

小宮 弘毅*

要約：1988-1989年度に Index Medicus および医学中央雑誌に見られた SIDS 関連文献144編を検討し、SIDS 研究の最近の動向を検討した。疫学的検討では、乳幼児死亡率が減少している中で SIDS 発生頻度は変わらないかむしろ増加傾向にあることが示されている。病因病態に関しては、出生前の胎児環境がなんらかの微細な異常を自律神経系を司る脳幹部にもたらし、出生後の感染などの僅かな誘引が呼吸循環系に異常を引き起こす事が考えられている。ホームモニタリングの有効性は疑問視され適応についても未だ明瞭ではない。SIDS ハイリスクのスクリーニングとしては polygraphic study よりは、neurobehavioural assesment の有効性が検討されるようになった。

見出し語：乳幼児突然死症候群、Sudden Infant Death Syndrome(SIDS)、ホームモニタリング

1. はじめに

本研究年度に医学中央雑誌および Index Medicus に見られた乳幼児突然死症候群関連文献は、邦文9編・英文135編の計144であった。邦文では抄録・総説が各3編で研究論文は極めて少なく、いまだ本疾患に対する関心が薄いことを物語っている。英文では、英国・オーストラリア・ニュージーランドからの論文が多いのが目だつ。相変わらず、多岐に渡る病因病態が述べられているが、かつ目に値する新知験は見あたらない。依然乳幼児死亡の最大の原因であることには変わりはないが、新生児死亡の原因としても SIDS が認められつつある。

2. 乳幼児突然死症候群の疫学

その発生頻度は変わらないか、むしろ全体の乳幼児死亡が減少している中でその重要性が高まっていることが示されている(1263,1265,1286)。最も発生頻度が高いのはニュージーランドのマオリ族11.5(1376)、最も少ないのが香港0.3(1381)であり、オランダでは0.46から1.3に(1382)、ノールウーでは1.02から2.34(1368)に増加傾向にある。人種による差(1380,1369)、出生及び死亡月による差(1346)コカイン常用の母親による差(1277,1377)、DPT との関係(1281,1355)などの疫学的報告があるが、antenatal にハイリスクの既往のある症例および IUGR に SIDS が多い(1345,1356、

1370)ことは子宮内環境と SIDS の関係を示唆し、また休日や週末に SIDS が多い(1350,1263)ことや若い未婚の母親や失業者率が高くなると SIDS が多くなる (1263,1286)などは SIDS の社会的要因の重要性を示すものである。突然死の中で SIDS が占める割合は約半数であるが(1338b、1295)、アメリカにおいても地方では剖検率は35-65%で SIDS と診断する検視官も不十分であり相変わらず SIDS の疫学的調査においてはその診断の段階での問題が残されている(1352)。

3. 乳幼児突然死症候群の病因病態

サア-ファクタント(1264,1357)、鉄剤(1323,1320)、アスピリン感受性(1266,1267)、セレン欠損症 (1279)、Hyperthermia (1373, 1388) ; gastroesophagealreflex(1365)、感染(1293,1301)、心機能異常(1304,1358,1361)代謝性疾患(1308,1316)、 β -endorphin などの neuropeptide(1302,1240,1342)における SIDS の関係が研究されているが、脳幹部の呼吸を中心とした自律神経系の微細な異常が基礎にあり(1282,1283,1307,1328,1299,1325,1335,1338,1343,1372,1310)、無呼吸などの SIDS につながる出来事を引き起こす誘引として多くの事柄が挙げられていると解釈できる。そのような異常または SIDS を引き起こし易い感受性は、出生前に子宮内での insults によって形づくられている可能性が示されている(1345,1356,1370)。Naeye(1310)は31例の SIDS の9例に脳幹部に hypomyelination および20例に第12神経の異常を認めたことからその両者によって中枢性無呼吸および上気道閉鎖による長期に渡る hypoxemia があることを骨髄所見でも normoblastic hyperplasia が認められることから示し、彼の歴史的な chronic hypoxia theory を再び主張している。ま

た Rognum ら(1284)も SIDS の剖検例の水晶体に高いレベルの hypoxanthine を認めたことから死亡までに長期に hypoxemia があったことを示した。他方、Oehmichen ら(1327)は小脳皮質の cytologic investigation では hypoxia の所見が無いことを、また骨のミネラル含有量の検討でも(1294)SIDS と control 群に差が無いところから SIDS で chronic な病態が続いたことを否定する所見が記載されている。睡眠姿勢特にうつ伏せ寝と SIDS の関係については議論が沸騰しており(12276,1290,1291,1321,1326,1332,1334,1373)、de Jonge(1382)はオランダで1969-71年の SIDS 発生頻度が0.46であったのが1978年には1.31と3倍になったのは1971年にマスコミなどを介し全国的にうつ伏せ寝が普及したことと関係があるとしている。SIDS の事故や乳幼児非虐待症候群との関連もまだ問題となっており(1330,1338c,1363,1273,1366)、Meadow(1283)は SIDS の2-10%は窒息でありそのほとんどは母親によるとし、SIDS の診断名そのものを否定する発言をしている。

4. SIDS ハイリスク児のホームモニタリングとスクリーニング

ホームモニタリングは、ハイリスク児だからと使用するのではなく、その適用を選ぶことにほとんどが一致しており(1269,1285,1315,1351)、具体的な一案として出生前ケアを充実し、母児クリニクのシステムを改善して幼い児が外来での呼吸感染症にかからないようにすること(1338f)等が挙げられている。

ハイリスク児のスクリーニングを polygraphic な方法で行う事は、単なる無呼吸や呼吸のパターンでは意味がなく睡眠特に REM 睡眠と心拍数の

細変動性など微細な自律神経系の微妙なバランスの乱れを捉えることでようやくなんらかの意味付けがなされうる(1282,1283,1292,1359)。一方、新生児の行動異常の解析から SIDS のハイリスク児をスクリーニングする試みもなされ(1354)、Einspieler ら(1360)は、difficulties in awakening, shrill cry, apathy, few movements during sleep, cyanosis などが SIDS 児の多くみられていることを示した。

5. その他

SIDS の家族の中で両親特に母親に対する精神的なサポートの重要性(1338a)は以前から広く知られていたが、SIDS 発生の同胞としての子供に

対するサポートは小児科医の役目である事が述べられている(1338g)。

Kahn らは(1312)、26例の ALTE のためホームモニタリングを受けた児26名を6-10年(平均7年間)フォローし、行動やIQにコントロールと差がなかった事を示し、思春期までのフォローが必要であるとしながらも ALTE が恒久的な障害による物でなく発達の一時期にみられる現象である可能性を示した。

(本文中の引用文献番号は SIDS 研究班共通番号である。)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:1988-1989 年度に Index Medicus および医学中央雑誌に見られた SIDS 関連文献 144 編を検討し、SIDS 研究の最近の動向を検討した。疫学的検討では、乳幼児死亡率が減少している中で SIDS 発生頻度は変わらないかむしろ増加傾向にあることが示されている。病因病態に関しては、出生前の胎児環境がなんらかの微細な異常を自律神経系を司る脳幹部にもたらし、出生後の感染などの僅かな誘引が呼吸循環系に異常を引き起こす事が考えられている。ホームモニタリングの有効は疑問視され適応についても未だ明瞭ではない。SIDS ハイリスクのスクリーニングとしては polygraphic study よりは、neurobehavioural assesment の有効性が検討されるようになった。